

## 去年の木

いっぼんの木と、いちわの小鳥とはたいへんなかよしでした。小鳥はいちんちその木の枝で歌をうたい、木はいちんちじゅう小鳥の歌をきいていました。けれど寒い冬がちかづいてきたので、小鳥は木からわかれてゆかねばなりません。した。

「さよなら。また来年きて、歌をきかせてください。」  
と木はいいました。

「え。それまで待っててね。」  
と、小鳥は行って、南の方へとんでゆきました。

春がめぐってきました。野や森から、雪がきえていきました。

小鳥は、なかよしの去年の木のところへまたかえっていきました。

ところが、これはどうしたことでしょう。木はそこにありませんでした。根っこだけのがこっていました。

「ここに立ってた木は、どこへいったの。」  
と小鳥は根っこにききました。

根っこは、

「きこりが斧おのでうちたおして、谷のほうへもっていったちやったよ。」  
といいました。

小鳥はたにのほうへとんでいきました。

谷の底には大きな工場があつて、木をきる音が、びんびん、とじていました。

小鳥は工場の門の上にとまって、

「門さん、わたしのなかよしの木は、どうなったか知りませんか。」  
とききました。

門は、

「木なら、工場の中でこまかくきりきざまれて、マッチになつてあつちの村へ売られていったよ。」

といいました。

小鳥はむらのほうへとんでいきました。

ランプのそばに女の子がいました。

そこで小鳥は、

「もしもし、マッチをごぞんじありませんか。」

とききました。

すると女の子は、

「マッチはもえてしまいました。けれどマッチのともした火が、まだこのランプにともっています。」

といいました。

小鳥はランプの火をじっとみつめておりました。

それから、去年の歌をうたって火にきかせてやりました。火はゆらゆらとゆらめいて、ここからよろこんでいるようにみえました。

歌をうたってしまうと、小鳥はまたじっとランプの火をみていました。それから、どこかへとんでいってしまいました。

底本\*「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者\*新美南吉

出版社\*大日本図書

出版年\*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用\*1996年9月1日第10刷発行

入力\*安城市中央図書館職員